

平成30年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第2号（6月予報）

平成30年6月1日 秋田県病害虫防除所

<p>【内容】</p> <p>I. 予報の要点 II. 主要病害虫の向こう1か月の予報 III. 発生予報と防除対策 IV. 気象予報 V. 気象データ VI. 用語の説明</p>	<p>【問合せ先】</p> <table> <tr> <td>秋田県病害虫防除所</td> <td>018-881-3660</td> </tr> <tr> <td>秋田県農業試験場</td> <td>018-881-3326</td> </tr> <tr> <td>秋田県果樹試験場</td> <td>0182-25-4224</td> </tr> <tr> <td>かづの果樹センター</td> <td>0186-25-3231</td> </tr> <tr> <td>天王分場班</td> <td>018-878-2251</td> </tr> </table>	秋田県病害虫防除所	018-881-3660	秋田県農業試験場	018-881-3326	秋田県果樹試験場	0182-25-4224	かづの果樹センター	0186-25-3231	天王分場班	018-878-2251
秋田県病害虫防除所	018-881-3660										
秋田県農業試験場	018-881-3326										
秋田県果樹試験場	0182-25-4224										
かづの果樹センター	0186-25-3231										
天王分場班	018-878-2251										
<p>【お知らせ】</p> <p>◇今回の予報対象期間は6月を主とします。次回の発表予定は平成30年6月29日です。</p> <p>◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 http://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</p> <p>◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。http://www.pref.akita.lg.jp/suiden/</p> <p>◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。http://www.famic.go.jp/</p> <p>◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。http://www.e-komachi.jp/</p>											

I. 予報の要点

水 稲	<p>葉いもちの感染量はやや少ないと予想されます。余り苗は直ちに処分してください。オリゼメート粒剤を使用する場合、移植栽培では6月15日頃、直播栽培では6月23日頃に散布してください。</p> <p>斑点米カメムシ類の発生時期は早く、発生量はやや多いと予想されます。水田除草剤を適切に使用しホタルイ類やノビエの発生を抑えるとともに、農道・畦畔や休耕田の除草を行ってください。</p>
小 麦	<p>赤かび病の発生量はやや多いと予想されます。1回目（開花始期）の防除を行っていない場合、直ちに防除してください。</p>
大 豆	<p>タマナヤガの発生量は多いと予想されます。耕起前に雑草が多かったほ場や例年被害がみられるほ場では、薬剤による防除を行ってください。</p>
野 菜	<p>ねぎでは、べと病の発生量は平年並と予想されますが、予防や発病初期の防除に努めてください。</p> <p>キャベツ（初夏どり）ではモンシロチョウの発生量がやや多い、ヨトウガの発生量が多いと予想されます。薬剤防除は防除効果が高い若齢幼虫期から行ってください。</p> <p>えだまめでは、ネキリムシ類（タマナヤガ）の発生量が多い、ツメクサガの発生量がやや多いと予想されます。幼虫の発生初期に薬剤防除を行ってください。</p>

果 樹	<p>りんごの病害では全県でモニリア病が多く、県北部で黒星病が多いと予想されます。モニリア病は実ぐされを摘み取って焼却するか土中に埋めてください。黒星病の発生が確認された園地では10日間隔で薬剤防除を実施してください。</p> <p>りんごの虫害ではナミハダニと果樹カメムシ類の発生が多いと予想されます。ナミハダニの発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布してください。果樹カメムシ類は園内への飛来状況をよく観察し、飛来が多い場合は薬剤防除を実施してください。</p> <p>なしの病害では黒星病がやや多いと予想されます。発病部位を除去し、降雨が続くと予想される場合には7日間隔で薬剤防除を実施してください。</p> <p>なしの虫害ではナミハダニと果樹カメムシ類の発生が多いと予想されます。ナミハダニの発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布してください。果樹カメムシ類は園内への飛来状況をよく観察し、飛来が多い場合は薬剤防除を実施してください。</p> <p>ぶどうではべと病の感染量がやや多いと予想されます。Q o I 剤耐性菌が出現している園地では薬剤の選択に注意してください。</p>
-----	---

II. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	葉いもち	全県	やや早い	—	やや少ない
	ばか苗病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	イネミズゾウムシ	全県	早い	—	平年並
	イネクビボソハムシ (イネドロオイムシ)	全県	やや早い	—	やや少ない
	イネミギワバエ (イネヒメハモグリバエ)	全県	—	—	少ない
	斑点米カメムシ類 アカスジカスミカメ アカヒゲホソミドリカスミカメ	全県	早い 早い	— —	やや多い やや多い
	フタオビコヤガ (イネアオムシ)	全県	—	やや少ない	やや少ない
小 麦	赤かび病	全県	やや早い	—	やや多い
大 豆	タマナヤガ	全県	—	—	多い
ねぎ(夏どり)	べと病	全県	—	—	平年並
きゅうり	黒星病	全県	—	—	少ない
キャベツ (初夏どり)	菌核病	全県	—	—	平年並
	コナガ	全県	—	やや少ない	平年並
	モンシロチョウ	全県	—	平年並	やや多い
	ヨトウガ	全県	—	多い	多い
えだまめ	べと病	全県	—	平年並	平年並
	ネキリムシ類(タマナヤガ)	全県	—	—	多い
	ツメクサガ	全県	—	平年並	やや多い
りんご	斑点落葉病	全県	やや早い	—	平年並
	モニリア病	全県	—	多い	多い
	黒星病	県北部	—	多い	多い
		県中央部・県南部	—	平年並	平年並
	炭疽病	全県	やや早い	—	平年並
	輪紋病	全県	やや早い	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	早い	—	やや少ない
	ナミハダニ	全県	—	多い	多い
	ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ) (リンゴモンハマキ)	全県	早い	やや少ない	やや少ない
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャパネアオカメムシ)	全県	—	多い	多い
	キンモンホソガ	全県	早い	—	やや少ない
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	黒斑病	県北部・県中央部	—	多い	やや多い
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	やや早い	—	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	多い	多い
	果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャパネアオカメムシ)	県北部・県中央部	—	多い	多い
ぶどう	べと病	—	—	—	やや多い
	芽枯病	県南部	やや早い	やや少ない	やや少ない
	灰色かび病	県南部	—	平年並	やや少ない
	晩腐病(花蕾発病)	県南部	—	—	やや少ない
	チャノキイロアザミウマ	県南部	やや早い	—	平年並
飼料作物	アワヨトウ	全県	早い	—	—

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感染時期 [全般発生開始期]	感 染 量
1. 葉いもち	やや早い (前年より早い)	やや少ない (前年より少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(－/±)。

イ、苗代巡回調査における育苗施設内やその周辺における稲わら、籾殻の確認地点率はやや低かった(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、余り苗は、直ちに泥に埋めて処分する。

イ、育苗期防除をしなかった場合、いもち病の持ち込みや早期の伝染のおそれがあるため、余り苗や本田をよく観察して発病の有無を確認する。

ウ、乾燥状態で保管された稲わらや籾殻は本病の伝染源となるので、これらを使用した野菜ほ場の周辺では葉いもちが早期に発病していないか確認する。

エ、オリゼメート粒剤を使用する場合は、移植栽培では6月15日頃(12～18日)、直播栽培では6月23日頃(20～25日)に2kg/10a散布する。

オ、箱施用剤又は側条施用剤を使用していないほ場では感染苗の持ち込み等により早期に本田で発病することがある。6月15日までに発病した場合は、直ちにオリゼメート粒剤を散布し、その15～20日後にも同剤を散布する。6月15日以降に発病した場合は、オリゼメート粒剤の散布に加え、予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン剤又はノンプラス剤)の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. ばか苗病	－	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、育苗期巡回調査における発病箱率は1.1%(平年2.2%)でやや低く、発病地点率は3.5%(平年15.9%)で低かった(/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、採種ほ周辺のほ場で発病茎を見つけたときは、株ごと抜き取り、泥に埋めて処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発生時期 [本田侵入盛期]	発 生 量
3. イネミズゾウムシ	早い (前年並)	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(－/)。

イ、越冬後成虫の飛翔筋発達程度を目安となる有効積算温度の到達度は、5月31日現在73.3%(平

年26.1%) と高い (-/+)。

ウ、予察灯調査における前年の第1世代成虫の誘殺数はやや少なかったことから、越冬量はやや少ないと推定される (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月上旬に越冬後成虫が株当たり0.3頭(食害株率90%以上に相当)以上であった場合は、シクロサルU粒剤2又はトレボン粒剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. イネクビボソハムシ (イネドロオイムシ)	やや早い (-)	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ前年並と予報されている (-/±)。

イ、前年の発生量はやや少なく、被害程度は前年並であった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、産卵盛期(6月上~中旬)の株当たり卵塊数が0.5個を超える場合は、ふ化盛期(6月中旬)に茎葉散布剤で防除する。ただし、有機リン系殺虫剤、カーバメート系殺虫剤又はプリンス剤に対する抵抗性が確認されている地域では、トレボン粉剤DL又はMR、ジョーカー粉剤DLを用いる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. イネミギワバエ (イネヒメハモグリバエ) (第2世代)	-	少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/-)。

イ、5月下旬の巡回調査(全県30地点)における株当たり産卵数は0.04個(前年0.41個)とやや少なく (/-)、要防除水準を超えるほ場はなかった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、スタウトパディート箱粒剤、ルーチンデュオ箱粒剤、ルーチンパンチ箱粒剤、ブイゲットグラインドオンコル粒剤、ブイゲットフェルテラ粒剤、プリンス粒剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤、Dr.オリゼフェルテラ粒剤、パディート箱粒剤、フェルテラ箱粒剤を育苗箱に施用した場合とガードナーフロアブルを育苗箱にかん注した場合は、その後の防除の必要はない。

イ、今後移植するほ場や直播ほ場では第2世代幼虫の発生に注意する。6月中旬の産卵状況を確認し、産卵数が多い場合は幼虫発生初期に水面施用剤又は茎葉散布剤で防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 斑点米カメムシ類 (越冬世代成虫) アカスジカスミカメ アカヒゲホソミドリカスミカメ	早い (前年並) 早い (前年並)	やや多い (前年より多い) やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/±）。

イ、牧草地すくい取り調査におけるアカヒゲホソミドリカスミカメの越冬世代幼虫の初確認日は平年並、越冬世代成虫の初確認日はやや早く、幼虫の発育は早い（-/）。

ウ、前年成熟期（9月中旬）に行なった水田内すくい取り数は、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメとも多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、6月上旬から繁殖地となる農道・畦畔、休耕田等の除草を地域でまとまって行う。

イ、水田除草剤を適切に使用し、アカスジカスミカメの侵入原因となる水田内のホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエの除草を確実に行う（5月16日発表の防除対策情報第3号を参照）。雑草の生育状況を確認し処理時期が遅れないようにする。

ウ、一発処理除草剤のフロアブル剤、顆粒水和剤、ジャンボ剤、少量拡散型粒剤は藻類・表層剥離がほ場の30%以上発生しているほ場では拡散性が劣るので、散布は藻類・表層剥離の発生前から発生初期までとする。

エ、一発処理除草剤の処理時期の遅れなどにより残草が多い場合は、草種に応じた中・後期剤を適切に散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
7. フタオビコヤガ（イネアオムシ） （第1世代）	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並、日照時間はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、育苗期巡回調査における育苗施設内の成虫数はやや少ない、卵確認地点率はやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、フェルテラ箱粒剤、プリンススピノ粒剤6、ルーチンアドスピノ箱粒剤、ルーチンエキスパート箱粒剤のいずれも施用せず、食害が多く、実害を生じるおそれがある場合は、6月上旬にチューンアップ顆粒水和剤、トレボン粉剤DL、パダン粉剤DL、MR. ジョーカーEWのいずれかを散布する。

8. その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
縞葉枯病	—	—	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。
ニカメイガ （2回発生地帯の 第1世代）	—	—	少ない	防除の必要なほ場は少ないと見込まれる。

B 小麦

病虫害名	予 報 内 容	
	発生時期	発生量
1. 赤かび病	やや早い（－）	やや多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ前年並と予報されている（－/±）

イ、各地域振興局の定点調査によると出穂期は、秋田（銀河のちから）5月10日（平年5月10日）、仙北（ネバリゴシ）5月23日（平年5月21日）、平鹿（ネバリゴシ）5月24日（5月22日）で前年並であった（±/ ）。

ウ、前年収穫期の発生量はやや多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、まだ防除を行っていない場合は、直ちにシルバキュアフロアブル又はストロビーフロアブルで防除する。その後7～10日後にトップジンM水和剤、トップジンM粉剤DL、イオウフロアブル、石灰硫黄合剤のいずれかで防除する。

イ、2回目は、1回目の防除から7～10日後にトップジンM水和剤、トップジンM粉剤DL、イオウフロアブル、石灰硫黄合剤のいずれかで防除する。

2. その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
うどんこ病	－	－	前年並	赤かび病との同時防除が可能である。
さび病	－	－	前年並	

C 大豆

病虫害名	予 報 内 容	
	発生時期	発生量
1. タマナヤガ	－	多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける4月1半旬～5月5半旬の誘殺数は122頭（平年58.4頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内やほ場周辺の雑草処理を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

①クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。

②播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。

③播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、本種は長距離移動性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。

D ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	平年並（前年よりやや多い）

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、5月4半旬の巡回調査における発病株率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、気温が15℃前後で降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早いので予防や発病初期の防除に努める。

イ、展着剤を加用した薬液を、葉先から株元まで十分付着するように散布する。

ウ、発病株を確認した場合は、治療効果のあるリドミルゴールドMZやアミスター20フロアブルを散布する。

エ、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる薬害を生じる場合があるので、散布間隔を2週間以上とる。

E きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	—	少ない（前年より少ない）

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /-）。

イ、前年の発生量はやや少なかった（ /-）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、本病は冷涼多湿条件で発病が多く、県内では県北部で発生しやすい。

イ、多発すると薬剤による防除が難しくなるため、発病前から定期的にジマンダイセン水和剤、ダコニール1000等を散布し、予防に努める。特に、前年秋に発病が多かったほ場では定植直後から防除を開始する。

ウ、発病を確認した場合は、茎葉、果実、巻きひげ等の発病部位を取り除き、速やかにスコア顆粒水和剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤等を散布する。

F キャベツ（初夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 菌核病	—	平年並（前年並）

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、前年の初夏どり（収穫期）での発生量は平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、前年に発病が見られたほ場では、結球始期からスミレックス水和剤、ロブラール水和剤等を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. コナガ	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、秋田市予察ほにおける4月5半旬～5月5半旬のフェロモントラップの誘殺数は223頭（平年178.0頭）で平年並だった（ /±）。

ウ、5月6半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.02頭（平年0.08頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生初期で幼虫の密度が低いときは、遅効性だが残効が長い昆虫成長制御剤（IGR剤）又はBT剤を散布する。

イ、生育期から結球期にかけて発生が多くなってきたら、ネライストキシシン系剤、アフーム乳剤、コテツフロアブル、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC、トルネードエースDF、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5等を散布する。なお、フェニックス顆粒水和剤及びプレバソンフロアブル5は2週間程度の残効があるため、防除回数を減らすことができる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. モンシロチョウ	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、5月6半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.02頭（平年0.05頭）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ヨトウガ（第1世代）	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、秋田市予察ほにおける4月5半旬～5月5半旬のフェロモントラップの総誘殺数は4頭（平年0.9頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、コナガとの同時防除に努める。

G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. ベと病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、5月5半旬の巡回調査における発病茎率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、降雨が続くと予想される場合は、フェスティバルC水和剤やランマンフロアブルを株元や葉裏にかかるように丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. ネキリムシ類（タマナヤガ）	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、秋田市大豆予察ほのフェロモントラップにおける4月1半旬～5月5半旬の誘殺数は122頭（平年58.4頭）で多かった（ /+）。

イ、5月5半旬の巡回調査における被害茎率は0%であった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にはほ場内やほ場周辺の雑草処理を行う。

イ、例年被害が見られるほ場では、次のいずれかの方法で防除する。

①クルーザーF S30又はクルーザーMAXXを種子に塗沫処理して播種する。

②播種時にカルホス粉剤又はカルホス微粒剤Fを作条施用し、土壌混和する。

③播種時～本葉2葉期にカルホス粉剤又はネキリエースKを株元の土壌表面に散布する。

ウ、本種は長距離移動性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。また、沿岸部での被害が大きくなることがあるのであわせて注意する。

エ、本種その他、カブラヤガは幼虫越冬で年3回発生し、大豆や雑草の枯葉に産卵するため、アに準じて除草を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ツメクサガ	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、5月5半旬の巡回調査における50茎当たりの幼虫数は0頭（平年0頭）で平年並であった（ /±）。

ウ、5月5半旬の巡回調査における食害茎率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本種は年2回発生し、第1世代幼虫は6～7月に発生する。葉脈を残して葉を食害するため、ほ場をよく観察する。

イ、幼虫の発生初期にトレボン乳剤を散布する。

H りんご

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 斑点落葉病	やや早い（前年より早い）	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花日は5月11日で平年より5日早かった（- / ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシシンAL水和剤、ユニックス顆粒水和剤47、ロブラール水和剤のいずれかを主剤に加用して使用する。また、これらの剤は年間1回の使用とする。ただし、ポリオキシシンAL水和剤の効力が低下している園地では同剤を使用しない。

ウ、QoI（ストロビルリン系）剤は耐性菌出現回避のため、年間2回以内の使用とする。

エ、オキシラン水和剤、キノンドー水和剤40、キノンドーフロアブル、シトラノフロアブル、ドキリンフロアブル、パスポート顆粒水和剤、ポリオキシシンO水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるため落花20日後頃まで使用しない。

オ、ダイパワー水和剤、ベルコート水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるため落花25日後頃まで使用しない。

カ、ストライド顆粒水和剤はサビ果を発生させるおそれがあるため落花30日後まで使用しない。

キ、ベフキノン水和剤、ベフラン液剤25はサビ果を発生させるおそれがあるため落花40日後頃まで使用しない。また、千秋、玉林では果実色に障害を生じるおそれがあるため7月上旬まで使用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. モニリア病（実ぐされ）	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、5月下旬の巡回調査における実ぐされ発病果そう率は0.4%（平年0.1%）で高かった（ / +）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、実（株）ぐされは翌年の伝染源になるため、見つけ次第摘み取って焼却するか土中に埋める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 黒星病	—	県北部：多い（前年並） 県中央部・県南部：平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、5月中～下旬の巡回調査における発病花そう率は、県北部では4.3%（平年0.0%）で高く（ /+）、県中央部・県南部では0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は直ちに摘み取り適切に処分する。摘果作業時には発病の有無をよく観察し、発病果実を園内に残さないよう注意する。

イ、落花25日後までは10日間隔で防除する。その後は、約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。発生が確認された園地では10日間隔で散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4. 炭疽病	やや早い（-）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花日は5月11日で平年より5日早かった（- / ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、ニセアカシアは伝染源となるため、園地の近くにある場合は伐採する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
5. 輪紋病	やや早い（-）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花日は5月11日で平年より5日早かった（- / ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、防除剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、枝幹のいぼ病斑は削り取りトップジンMペーストを塗布する。本剤の使用回数は3回以内なので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	早い（前年並）	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、横手市予察ほにおける越冬世代成虫の初誘殺は5月6半旬（平年6月1半旬）で早かった（－ / ）。

イ、前年秋期の被害果率はやや低かった（－ / ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するため、産卵状況に注意し適期に殺卵剤を散布する。

ウ、合成ピレスロイド剤の散布時期は、県北部が7月上～中旬、県中央部・県南部が6月下旬～7月上旬と見込まれる。

エ、交信かく乱剤の使用を予定している場合は、直ちに設置する。

オ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

カ、サイアノックス水和剤、スプラサイド水和剤、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は、サビ果を発生させるおそれがあるため落花後1か月間は使用しない。また、スミチオン水和剤40、パーマチオン水和剤は薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるため高温時や衰弱樹に散布しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	－	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ / + ）。

イ、5月中～下旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.0頭（平年0.0頭）で平年並であったが発生地点率は9.1%（平年2.6%）で高かった（ / + ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生の多い園地では、直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

ウ、カネマイトフロアブルにアリエッティC水和剤を混用する場合は、凝集を避けるため、先にカネマイトフロアブルを希釈する。

エ、マイトコーネフロアブルにアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、凝集を避けるため、先にマイトコーネフロアブルを希釈する。また、薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるため、マイトコーネフロアブルとスミチオン水和剤40は混用しない。

オ、ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、凝集を避けるため、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する。

カ、スターマイトフロアブルにアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、凝集を避けるため、先にスターマイトフロアブルを希釈する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. ハマキムシ類（第1世代） （リンゴコカクモンハマキ） （リンゴモンハマキ）	早い（－）	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/ ）。
- イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花日は5月11日で平年より5日早かった（－/ ）。
- ウ、5月中～下旬の巡回調査における寄生花そう率は0%（平年0.2%）でやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、リンゴコカクモンハマキの防除時期は、県北部が6月5半旬～6半旬、県中央部・県南部が6月4～5半旬と見込まれる。フェロモントラップ利用園では、誘殺最盛期の2週間後に防除剤を散布する。
- イ、防除剤は、エクレシルSE、オリオン水和剤40、サムコルフロアブル10、ダーズバンDF、ディアナWDG、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。ただし、ダーズバンDFのリンゴコカクモンハマキ幼虫に対する効力が低下している地域では同剤を使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	－	多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、県内5か所の防除適期決定ほにおける5月1～4半旬の果樹カメムシ類の誘殺数は調査地点によって異なり、やや少ない～多かったが、総誘殺数は100頭（平年48頭）で多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、園内へのカメムシ類の飛来時期や飛来数は地域によって異なるため、飛来状況をよく観察する。特に山間部の園地では注意する。
- イ、園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、MR. ジョーカー水和剤などを散布する。
- ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため総使用回数に注意する。
- エ、スプラサイド水和剤とスミチオン水和剤40は、サビ果を発生させるおそれがあるため落花後1か月間は使用しない。また、スミチオン水和剤40は薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるため高温時や衰弱樹に散布しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
10. キンモンホソガ（第2世代）	早い（前年より早い）	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/ ）。
- イ、果樹試験場（横手市）におけるふじの落花日は5月11日で平年より5日早かった（－/ ）。
- ウ、前年9月の巡回調査における被害葉率はやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除時期は県北部が6月3～4半旬、県中央部・県南部が6月2～3半旬と見込まれる。

11. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
リンゴハダニ	—	やや少ない	平年並	向こう1か月の気温が高いと予報されているため、発生量は平年並と予想されるが、防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

I なし（日本なし）

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 黒星病	—	やや多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、潟上市予察ほにおける発病葉率は45.0%（平年21.7%）、発病果率57.5%（平年3.6%）でいずれも高かった（ /+）。
- ウ、5月中旬の巡回調査における発病果そう率（芽基部病斑）は0.2%（平年0.2%）、発生地点率は9.1%（平年8.2%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、被害部位は除去し、園外へ搬出し処分する。
- イ、防除剤の散布間隔は10日とする。降雨が続くと予想される場合又は発生の見られる園地では、散布間隔を7日とする。幸水は本病に弱いので特に注意して防除する。
- ウ、有袋栽培の場合は、防除剤を散布した後の袋かけを速やかに行う。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 黒斑病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、5月中旬の巡回調査における発病果そう率は0.5%（平年0.1%）で高く（ /+）、発病果率は0%（平年0%）で平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、発病の多い品種は南水、八雲である。
- イ、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。
- ウ、早期に袋かけを行う。袋かけ前の防除を徹底する。
- エ、防除剤の散布は10日間隔で行い、降雨が続くと予想される場合又は発生の見られる園地では散布間隔を7日とする。
- オ、多発条件下では、ポリオキシソール水和剤を主剤に加用するか、ポリキャプタン水和剤又はベルクガード水和剤を散布する。ただし、耐性菌出現回避のため、ポリオキシソール剤の使用回数は年間3回以内とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	やや早い (前年より早い)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、3月上旬～5月上旬の気温は平年並から高く推移した (+/)。

イ、前年の収穫期の被害果率は平年並であった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫は20～22時の気温が18℃以上になると産卵を開始するため、産卵状況に注意し適期に殺卵剤を散布する。

ウ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

エ、合成ピレスロイド剤の散布時期は、県北部が7月上～中旬、県中央部が6月下旬～7月上旬と見込まれる。

オ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害(葉裏に黒色斑)を発生させるおそれがあるため、これらの品種にかからないようにする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ナミハダニ	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、5月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.04頭(平年0.01頭)で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

イ、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいため、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ同系統又は作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ、前年秋期の越冬量調査から、クサギカメムシの越冬量はやや多いと推定される (/+)。

ウ、県内4か所の防適ほにおける5月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の誘殺数は一部園地で多く、89頭(平年19.0頭)で多かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、

飛来状況をよく観察して防除する。

イ、園内への飛来が多い場合はネオニコチノイド剤、有機リン剤、合成ピレスロイド剤のいずれかを散布する。ただし、合成ピレスロイド剤は6月下旬以降に使用する。

ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であるため、総使用回数に注意する。

6. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期 (感染時期)	発生量 (感染量)		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
輪紋病	平年並	—	平年並	防除剤の散布間隔は10日とするが、降雨が続くと予想される場合は7日とする。
リンゴハダニ	—	やや少ない	やや少ない	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。
ハマキムシ類	—	平年並	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 (ユキヤナギア ブラムシ)	—	やや少ない	平年並	シンクイムシ類、果樹カメムシ類と同時防除する。

J ぶどう

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. べと病	—	やや多い (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、前年9月の巡回調査における発病葉率が37.7% (平年1.8%) と高かったことから、越冬量は多いと推定される (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、アリエッティ水和剤は果粒が小豆大以降の散布で薬害や果粉の溶脱のおそれがあるため、落花7日後までに使用する。

イ、ホライズンドライフフロアブルは果粒が小豆大以降の散布で、アミスター10フロアブル、ストロビードライフフロアブル、フェスティバル水和剤、ベトファイター顆粒水和剤、ライメイフロアブル、ランマンフロアブルは果粒が大豆大以降の散布で、それぞれ果粉の溶脱のおそれがあるため、散布時期に注意する。

ウ、Q o I 剤、Q i I 剤、カルボン酸アミド剤又はシモキサニルを含む農薬は年間1～2回の使用とし、同一系統薬剤を連用しない。特に、Q o I 剤の耐性菌が確認されている地域では、本剤をべと病防除剤として使用しない。

病害虫名	予報内容	
	感染時期	感染量
2. 芽枯病	やや早い (—)	やや少ない (—)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、果樹試験場（横手市）における展葉は、キャンベル・アーリーが5月1日で平年より3日早く、巨峰が5月6日で平年より1日早かった（ - / ）。

ウ、5月中旬の巡回調査における発病芽率はキャンベル・アーリーで0.3%（平年2.4%）、巨峰は0%（平年0.5%）でいずれもやや低く、伝染源量はやや少なかった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病枝は剪去し、適切に処分する。

イ、開花期間に多雨が予想される場合は来春に多発するおそれがあるため、オーシャイン水和剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを開花前に散布する。

ウ、上記の剤は耐性菌出現回避のため、同一系統薬剤の使用回数を年間1～2回とし、連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 灰色かび病	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ / - ）。

イ、5月中旬の巡回調査における発病葉率はキャンベル・アーリー、巨峰いずれも0%（平年0%）で平年並であった（ / ± ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、花冠、不受精果などの花器残さは成熟果への伝染源となるため、落花後できるだけ早く払い落とす。

イ、発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるため、適切に処分する。

ウ、花穂の防除が重要であることから、開花直前、落花直後及び落花7日後の防除は必ず実施し、かつ、散布間隔は10日以上空けない。

エ、開花直前にカンタスドライフロアブル、ゲッター水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、フルピカフロアブル、ロブラール水和剤のいずれかを散布する。

オ、落花直後にアミスター10フロアブル、カンタスドライフロアブル、ゲッター水和剤、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフロアブル、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤、フルピカフロアブル、ロブラール水和剤のいずれかを散布する。

カ、落花7日後にアミスター10フロアブル、オンリーワンフロアブル、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤のいずれかを散布する。

キ、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除くエ～カに記した剤は耐性菌出現回避のため、使用回数は各剤1回とし、かつ、同一系統薬剤の連用は避ける。

ク、カンタスドライフロアブルは浸透性を高める効果のある展着剤や葉面散布剤を加用すると薬害（葉の白化）が発生するおそれがあるため混用しない。

ケ、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは幼果期～袋掛けまでの散布は、果房の汚れや果粉溶脱を生じることがある。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 晩腐病（花蕾発病）	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、前年の収穫期の巡回調査における発病果房率は、キャンベル・アーリーが0.1%（平年0.8%）、巨峰が0.5%（平年1.9%）でいずれもやや低かったことから、越冬量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病花穂は摘み取り、適切に処分する。

イ、笠かけ、袋かけはできるだけ早く実施する。

ウ、開花直前にジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを散布する。

エ、落花直後にアミスター10フロアブル、ジマンダイセン水和剤、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフフロアブル、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤のいずれかを散布する。

オ、落花7日後にアミスター10フロアブル、オンリーワンフロアブル、スイッチ顆粒水和剤、ストロビードライフフロアブル、ファンタジスタ顆粒水和剤のいずれかを散布する。

カ、ジマンダイセン水和剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルを除く上記の剤は、耐性菌出現回避のため使用回数は各剤1回とし、かつ同一系統薬剤の連用は避ける。

キ、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブルは幼果期～袋掛けまでの散布は、果房の汚れや果粉溶脱を生じることがある。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. チャノキイロアザミウマ	やや早い（-）	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（-/+）。

イ、前年の巡回調査において、キャンベル・アーリーの収穫前（8月下旬）の被害果房率は0%（平年0.2%）で平年並、巨峰（9月上旬）の被害果房率は0%（平年3.2%）とやや低く、越冬量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、例年6月中旬以降から発生が見られる。発生が多い園地では、ダントツ水溶剤、ディアナWD G、モスピラン顆粒水溶剤、合成ピレスロイド剤（アグロスリン水和剤、アディオン水和剤、スカウトフロアブル、バイスロイドEW）などを散布する。

イ、合成ピレスロイド剤の年間使用回数は1～2回とする。

K 飼料作物

病虫害名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. アワヨトウ	早い（前年並）	—

(1) 予報の根拠

ア、由利本荘市の糖蜜トラップにおいて5月6半旬（平年6月3半旬）に誘殺が確認された。能代市では5月6半旬まで誘殺は確認されていない（－/ ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、本種は長距離移動性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるため、今後の予察情報に注意する。

IV. 気象予報

平成30年5月31日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（6月2日～7月1日）

(1) 予想される向こう1か月の天候

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率

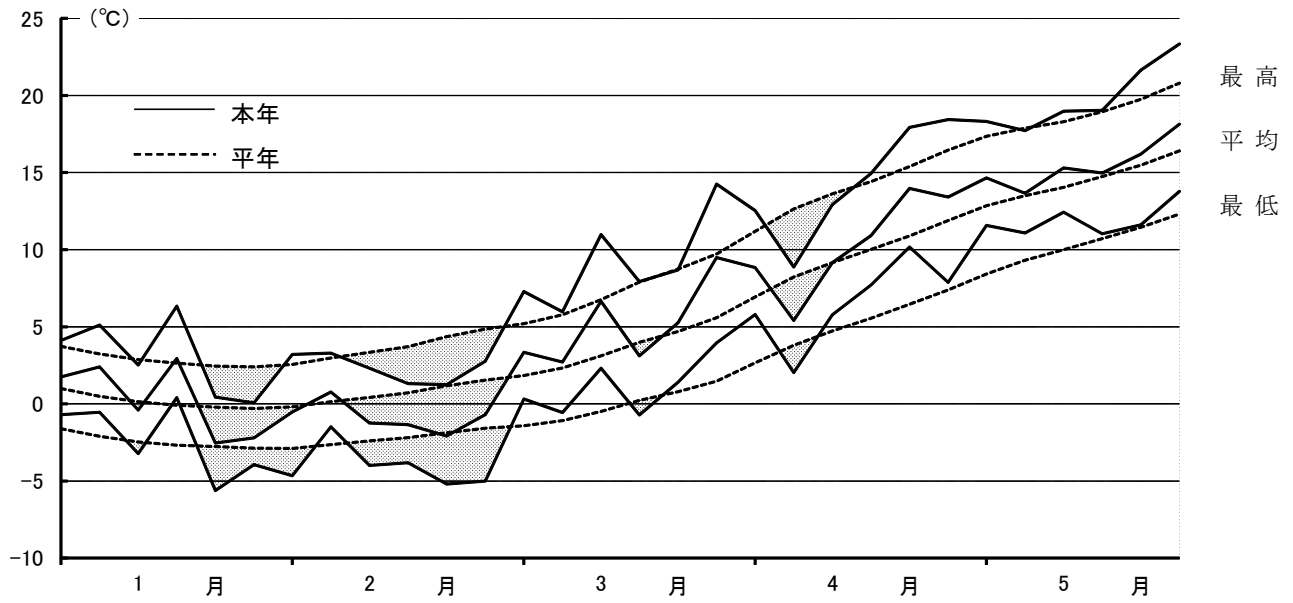
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20%	30%	50%
降 水 量	30%	30%	40%
日 照 時 間	30%	40%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率

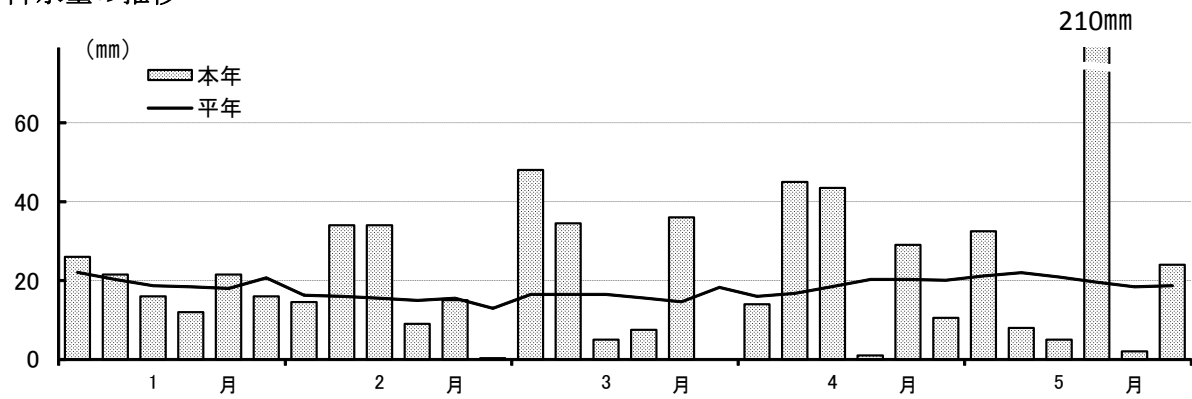
	低い	平年並	高い
6/2～6/8	10%	10%	80%
6/9～6/15	20%	40%	40%
6/16～6/29	30%	40%	30%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～5月6半旬)

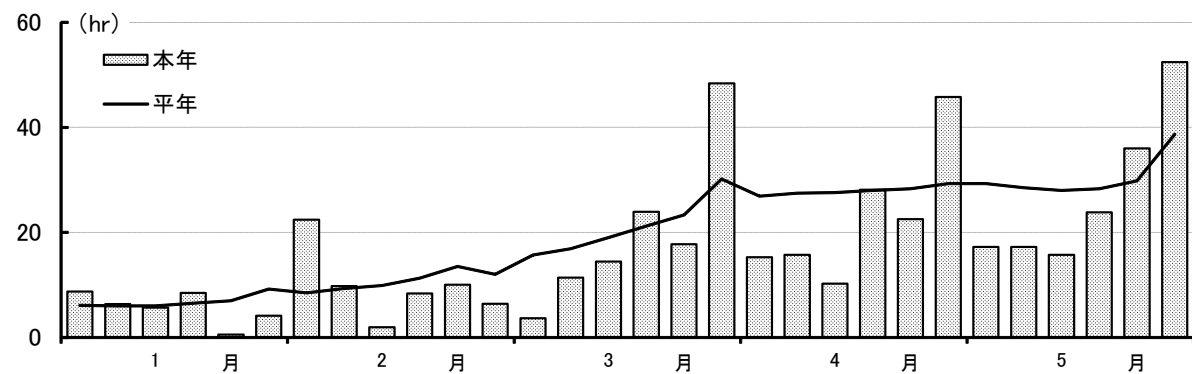
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値 ↓						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

**平成30年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～**

平成30年6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・養蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の家畜及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。